

【一】放送を聞いて、後の問いに答えなさい。

携帯電話への電話番号・連絡先の登録件数と友人の数の変化

	携帯電話への 電話番号・連絡先の 登録件数		日ごろ親しくつき合っている友人の数			
			近距離の友人の数		遠距離の友人の数	
	2001 年	2011 年	2001 年	2011 年	2001 年	2011 年
10 代	69.5	73.9	12.7	11.9	4.4	6.1
20 代	69.6	148.2	7.5	6.4	6.1	5.6
30 代	58.9	142.5	5.7	5.2	4.1	4.1
40 代	54.5	156.3	6.6	4.2	4.1	2.6
50 代	40.9	147.7	6.2	4.2	4.1	3.2
60 代	19.0	89.2	6.2	5.0	4.6	2.6
全体	55.6	128.8	7.1	5.7	4.5	3.7

（松田美佐「うわさとは何か」より作成）

(1) (問題は放送で指示します)

- ア この十年間で、どの年代についても、遠距離や近距離の友人が減少しているのは、現代人が深い人間関係を望まないからである。
- イ 普段のつきあいはあまりないが、連絡しようと思えばその場で連絡できる相手の数は、この十年間で減少していると考えられる。
- ウ 携帯電話の利用状況には、自分がコミュニケーションを取りたい相手を選んでつながることを望む、現代人の傾向が表れている。
- エ 個人が実際につきあう相手は、一般的に年齢が近い場合が多いのに対し、携帯電話では、年齢が離れた人と連絡しあうことが多い。

(2) (問題は放送で指示します)

- ア 二〇一一年の10代の、携帯電話への登録件数が少ないのは、日ごろ親しくつきあっている友人の数が少ないからである。
- イ 二〇一一年に近距離の友人の数が最も少なかった30代は、十年後、40代になっても同じように近距離の友人の数が少ない。
- ウ 二〇一一年と二〇一一年とを比較すると、携帯電話への登録件数は全体として増加しているが、その中で30代の増え方は最も大きい。
- エ 二〇一一年からの十年間において、どの年代でも、携帯電話への登録件数の増加とは逆に、日ごろ親しくつきあっている友人の数が減少している。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、方言の意味を（ ）で示したところがあります。

小学四年生の「私」(山田加奈子) はつい最近まで福岡市内の住宅街にある団地に
住んでいたが、両親と一つ年上の姉(真紀子)、妹とともに同じ県内の西部にある
田舎に移り住んできた。

近所のお寺で習字を教えていることを母がどこから聞きつけてきて、姉と二人で通うことになった。市内の団地にいたころも、個人宅で教えているところに、二年生から通わされていた。「通っていた」と素直に言いたいところだが、「通わされていた」という方が正確だと思う。

母は、自分が悪筆であることを恥ずかしく思っていたらしく、習字は大事、習字は大事、と言ってぐいぐい手を引いて教室に連れていったのだが、残念ながら悪筆というものは遺伝してしまうのである。習字を習い続けてきたというのに、一年生のころに比べてたくさん文字を書かなければいけなくなつて、どんどん字が乱暴に、へたくそになつていくばかりだった。

もちろん、この下手な字が、なんとかなるものならなんとかしたいとは思っていた。墨をすって、筆に墨を含ませて、白い紙の上で筆をすべらせる一連の行為は、嫌いではなかった。むしろ好きだった。好きなのに、いくら書いても書いても、満足がいくものがないのは、くやしいというより悲しいのだった。筆をぐっと紙に押し付けた瞬間は、お、今度こそうまくいく、と思えるのだが、ぐぐつと伸ばして、角を曲がつて次の曲げに入るころには、あ、失敗した、とわかる。しかし書くべき文字はまだまだ続く。絶望的な気持ちを抱えながら、筆を動かす虚しさは、悲しみに通じるのであった。

① あれをまた続けるのかあ、と思いつつも、お寺の本堂を利用した習字教室は、涼しい風が吹き抜けて気持ちよかった。お香やお堂の木の香りも、祖母の家を思い出すようで、なつかしい気持ちになった。

四年一組からは、木村義信くんと伊藤みゆきちゃんも来ていた。お習字の中津先生は、黒縁のぶあついAメガネをかけていたけれど、のんびりした低い声がやさしげで、先生が直してくれる朱色の文字も、なんとなくやさしげに見えた。

中津先生は、広島の前原で家族を失い、親戚中をわたりあいて、最後に福岡にやってきたのだという。

「じつとじつとたら(していたら)、たまらん気持ちになつてくるけん(くるから)、字、読むか、書くか、いつつもじつとたけえ(していたから)、字はうまくなったとよ。きみらもたくさん書いたら、ぜったいうまくなるけんね(なるからね)」
それが中津先生の口癖だった。

「読むのも好きやったと？」

「ああ、好きやったねえ。本読んどるあいだは、② そっちの国の人間になれるけんね(なれるからね)。そっちの国におる方が楽やし、おもしろかったしな。そんな質問するつちゅうことは(するということ)、カナコは、本が好きか？」

中津先生はなぜか子どもの名前に「ちゃん」や「くん」をつけず、みんな呼び捨てにしていた。最初はちよつとドキツとしたけれど、親戚のお兄ちゃんに遊んでもらっているときのような親しさがあつて、呼ばれるたびにいいな、と思っていた。

「そっちの国の人間になれるっていうの、先生、すごいわかります」

「そうか。そんなら先生の本、B力りていたらよかぞ(いいぞ)」

「わあ。はい、ありがとうございます」

あんまりうれしくて、声が裏返ってしまった。

お寺の隅に、中津先生のつくった「なかつ文庫」があり、C力し出しノートに名前を書いていけば本をかりていけるようになっていたのだ。私は、お習字のお手本を見るより熱心に文庫の棚を見つめ、『海底二万里』という題の本を手にとった。

「ジュール・ヴェルヌ、おもしろいぞう。読むの初めてか？」

中津先生が背中から声をかけてくれた。

「はい、初めてです」

「それ読んだら海の底の国で、たつぷり遊べるぞ」

「うひょう」

両手で本を握り、青い海に深緑色の潜水艦が、黄色い光を放ちながら沈んでいく表紙の絵をじつと見つめた。

「かなちゃん支度おそいけん(おそいから)、もうおいでくよ」

今日もまた姉に見捨てられそうになり、半泣きで、まっつと姉の背中に向かって叫んだ。

「急ぐけん(急ぐから)、自転車で行くよ」

姉が自分の水色の自転車に乗って走り出した。私もあわてて自分の白い自転車にまた

がった。習字道具を籠^{かご}に入れ、家の前の急勾配^{ききうばい}の坂道へ漕^こぎ出した。落下する、という感じに近い体感を受けつつ森へ続く坂道に到達し、すぐにハンドルを左に切って曲がり、勢いづいたままさらに坂を下っていった。前を走る姉の自転車が急にふらついた。どうしたんだろうと思ったときには、ステテコとラクダのシャツ姿のおじいさんが目の前にいた。坂道の下の方の道のと真ん中に立って、うすい笑みをうかべている。

「わあ、どいてー」

思わず声を上げたけれど、おじいさんはつつ立ったままだった。

え？ うわ？ よけてくれないの!?

おじいさんを選^よげるためにあわててハンドルを切りつつブレーキをかけると、急勾配をかけ下りてきたエネルギーがこらえきれずに反動としてのしかかってきた。あ、と思う間もなく、自転車がひっくりかえり、側溝^{そくこう}に自転車ごとつつこんでしまった。

一瞬間の中が真っ白になり、気絶してしまったようだ。おそらく、一秒にも満たないような短い時間だけ。

「かなちゃん!」

姉が、自転車を道端^{みちばた}に停^とめて戻^{もど}ってきてくれた。姉の方は、おじいさんをうまくかわして倒^{たお}れることもなかったようだ。

「むぎゅ」

自転車にからまるように溝^{みぞ}に落ち込んだ自分の身体^{からだ}が自分でもどうなっているのか、どこから動かせばいいのかわからず、漫画^{まんが}みたいな声が出てしまった。

「もう、世話かかるったい（世話が焼けるなあ）」

姉は、汗^{あせ}をかきながら私の身体をぐいと引き上げ、自転車も取り出した。自転車を引き上げてもらっている間になんとか立ち上がって、身体じゅうについたほこりを払^{はら}った。膝^{ひざ}を思い切り擦^すって、血がにじんでいた。③急にじんじん傷口^{きずぐち}が痛みはじめた。

「血がでとう（出ている）……」

姉に震える声でうったえると、そんな気にしとらんで、はいかんと（そんなこと気にしていないで、早く行かないと）、と急かされた。でも、と、不安な声しか出ない私に、姉は背中を向けたまま、なんとかなるけん、大丈夫やけん（何とかなるから、大丈夫だから）、と言った。姉に大丈夫やけん、と言われたら、大丈夫と思ってしまうのが妹という立場の悲しき習性である。

教室に着くと、他の人たちはすでに長机の前に正座して今日の課題に取り組んでいた。こんなにちはー、よろしくお願ひしまーす、と言いながら入っていく姉についていく

と、中津先生は他の子の手を取って指導中で、ちらりとこちらに顔を向けて、いらっしゃい、とひとこと言ったあと、ふたたび指導中の子の書に集中した。私の膝の傷には全く気付かなかった様子である。

姉の横に席を確保し、道具を置いて正座しようとして、はっとした。膝が血だらけなので、このまま正座すると、畳^{たたみ}に血がついてしまう。

「どうしよう、畳汚^{よご}すけん（汚すから）、正座なんてできん」

「大丈夫、半紙があるたい（あるよ）」

姉はおもむろに、道具の中から新品の半紙を取り出すと、縦半分^{たてはんぶん}に手で切って、ぺたぺたと私の両膝に一枚ずつ貼^はった。血が糊^{のり}の役割を果たして、縦長の半紙は私の膝に貼り付いた。

「こ、こんなんでよかと（こんなのでいいの）？」

「よかと（いいよ）」

姉は、まぶたを閉じておごそかにうなずいた。私は、膝の半紙を落とさないようにそろそろとしゃがんで正座した。

「まきちゃん、なんか、いたい」

「がまんしなさい」

姉は正しい。今の私は、がまんするしかないのだ。半紙に血がにじみ、半紙からさらに血がにじみ出ているような気がしたが、気にしない気にしない、と思いつつ墨をすった。気にしない、と思っても、身体を動かすたびに、半紙に傷口^{きずぐち}がかすかに擦れて痛い。「涼しい朝」とかいいう気分では全くないが、それが課題なので、とにかく「涼しい朝」を、ただただ書いた。

なんでこんなにがまんしてまで、習字をしなくてはいけないんだろうとは、ほのかに思ったが、とにかくやらねばならぬと言われたものは、やらねばならぬのだと思ひ込み、まさに「Ⅰ」の「Ⅱ」思い^④で、書き続けた。

（東直子『いと森の家』による）

注 *1 ステテコは男性用の下着の一種。ズボン下。

*2 ラクダのシャツはラクダ色（うす茶色）のはだ着。

*3 側溝は排水のために道路にそってつくられた溝。

*4 おもむろにゆつくりと。

(1) 〓 線部「悪筆」の意味を、文章中の言葉を用いて十字以内で答えなさい。(句読点は除くものとします)

(2) 〓 線部①「あれをまた続けるのかあ」とありますが、「あれ」とはどのような内容を示していますか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 今度こそ満足のいく作品が完成するのではないかと期待するが、いつもうまくいかず、情けない思いをしながら書くこと。
イ くり返し練習しても成果が表れないことがつらくなり、これ以上習い続けてもむだだと、あきらめそうになりながら書くこと。
ウ 地道に努力してもむくわれないことに嫌気がさし、できれば練習を投げ出してしまいたいと、苦しい思いをしながら書くこと。
エ 筆を動かすことが好きなのでうまく書こうとするのだが、思いどおりにいかないことに腹が立ち、やけを起こしながら書くこと。

(3) 〓 線部②「そっちの国の人間になれる」とありますが、中津先生にとって「そっちの国の人間になる」とはどのようなことを意味していたと考えられますか。次の文の空らんにあう適当な言葉を、考えて入れなさい。iは十字以内で、iiは十五字以内で答えること。(句読点は除くものとします)

(i) を忘れ、 (ii) こと。

- 7 -

(4) 〓 線部③「急にじんじん傷口が痛みはじめた」とありますが、それはなぜですか。理由として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 傷口から血が出ているのを見て初めて、自分がけがをしていることに気がついたから。
イ 身体全体の痛みがおさまらず、やっと傷口の様子を見ることができるようになったから。
ウ 相手にけがをさせていなかったことに安心し、ようやく自分の身体のことを考え始めたから。
エ 人前で転んでしまったことに対する恥ずかしさが消え、しだいに意識がはっきりしてきたから。

(5) 〓 線部④「まさに (I) の (II) 思い」で、書き続けた」とありますが、「 (I) の (II) ような」とは、「非常に苦しくつらい努力をする様子」を意味する慣用句です。(I) ・ (II) にあてはまる言葉を、文章中の言葉を用いてそれぞれ三字以内で答えなさい。

(6) 「私」は「姉」に対してどのような思いをいだいていますか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 一つしか年がはなれていないにもかかわらず、細かいところまで指図する「姉」に対し、反発を覚えながらも内心は頼もしく思っている。
イ 失敗ばかりする「私」にいらいらしながらも、年上としての役割を果たそうとあれこれ世話を焼いてくれる「姉」に、心から感謝している。
ウ 何かと足手まといになる「私」に、常にやさしく教えさとしてくれる「姉」を目標と考え、いつかはあのようにになりたいとあこがれている。
エ たった一歳の年齢差ではあるが、「私」に対してきびきと指示してくれる「姉」は、従わなければならない強い存在であると感じている。

(7) 文章中の A メガネ ・ B 力 ・ C 力 を漢字に直しなさい。(ハネやハライなどの点画もきちんと書くこと)

- 8 -

【三】 次の文章は、アフリカに生息するゴリラの群れを観察したことをもとに書かれたものです。文章中の「タイタス」「ベートーヴェン」「ピーナツ」は、個々のゴリラに付けられた名前です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

タイタスとともに木の洞で眠った経験は、私に強い感動をもたらしました。ゴリラですごいなあ。自分とは違う種類の動物をあんなふうを受け入れられるなんて、人間よりもずっと偉いなあ、とつくづく思ったものです。

ゴリラのすごいところは、相手を受け入れる能力だけではありません。①「負ける」という概念を持たないことも、特筆に値する特徴です。

ゴリラは誰を相手にしても「負けました」という態度をとらない。そんな感情もないし、そういう表情も備えていません。子どもでもメスでも、体力の差によって「参りました」という態度で相手に媚びることはないのです。これは、実にすごいことだと私は思います。ある意味で人間を超えていると言えるでしょう。

人間は立場によっていろんな表情を作って、相手との関係性を築きます。とてもかわないと、相手に屈服する。ここで負けてもほかでは勝とう、という心も持つ。人間は本心では相手に負けたくなくても、将来的な勝ちを見越してその場では負けたふりをすることもあります。ところがゴリラにはそういう面が一切ない。絶対に負けないのです。

これはつまり、ゴリラには優劣の意識もない、ということでもあります。この点で、ゴリラは人間ともサルとも異なっています。

ニホンザル社会には完全なヒエラルキーがあります。優位なサルは肩の毛を逆立て、尻尾をぴんと上げてのしと威張って歩きます。これは自分の優位性を誇示するためです。

また、劣位なサルは、自分が劣位であることをいつも態度で示します。優位なサルにいらまされたら、口を開けて歯茎を出す表情を浮かべます。人間から見ると笑っているように見えますが、これは「グレイメイス」というサルに独特の表現方法で、劣位なものが優位なものに対して、「自分はあなたへの敵対心は持つておらず、恐れています」という気持ちを示しています。また、劣位なサルは優位なサルからの視線を避けて横を向くこともあります。サル社会では、目を合わせることは敵対や挑戦を示すからです。

一方、ゴリラには歯をむき出す「グレイメイス」にあたる表情は存在しません。自分の立場が相手よりも下であることを示す表情をそもそも持っていないのです。また、ゴリ

ラはじつと相手の目を見つめます。威嚇されても相手の視線を避けないのです。

ベートーヴェンの群れに出くわしたとき、草むらからひょっこり顔を出した私の目を、ベートーヴェンはじつと見つめてきました。②これはまさにゴリラ特有の行動です。ゴリラは、見つめ合うことを通して相手が今何を考えているのか知ろうとします。

ゴリラは伸直りをするとき、対面してじつと顔を突き合わせるといふ解決方法をとります。これを「のぞき込み行動」と言います。

チンパンジーのように相手と抱き合ったり、毛づくろいしたりはしません。ただじつと顔を寄せてのぞき込むだけです。しばらく見つめ合っていると、ふつと緊張が解ける瞬間があり、さきほどまでけんかしていたゴリラ同士は気が済んだように自然に離れていきます。

もうひとつ、ゴリラの伸直りに関して興味深いのは、けんかの当事者だけではなく、第三者もその伸直りの行動に参加する場合があることです。けんかした二頭の間に第三者であるもう一頭が割り込んで、仲裁をします。

子ども同士やメス同士のけんかにはシルババックスのオスが大きな体を割り込ませて壁になる様子がよく見られます。そして、大人のオス同士のけんかには、メスや子どもが介入して仲裁します。力の優劣がないので、メスであれ子どもであれ、堂々とオス同士のけんかに割って入れるのです。

また、ゴリラのけんかの仲裁は、非常に平和的です。というのも、第三者はどちらにも味方しないのです。

ニホンザルでけんかが起こったときは、どちらか一方に加勢して争いを止めようとする動きが起きます。たいていの場合、優位なサルに大勢が味方して、けんかを終わらせるのです。

しかし、ゴリラはそういった態度をとりません。子どもやメス同士のけんかでは、大人のオスが介入して攻撃されたほうに加勢することが多いのですが、あえてどちらにも加勢せず、けんかをしている二頭の間に体を割り込ませてたうつぶせになる、という行動も見られます。

また、大人のオス同士のけんかを止めに入ったメスや子どもは、オスの背中や腰に軽く手で触れたり、顔を寄せてのぞき込みます。そうすると、たいていけんかをしていたオスたちは冷静さを取り戻して、一件落着となるのです。

ゴリラのけんかは、どちらかが勝ってどちらかが負ける、という決着を見ません。そんなことになる前に、第三者が仲裁に入る。誰も負けず、誰も勝たない。互いに対等な

ゴリラ社会に優劣の概念がないことは、その食事風景を見てもよくわかります。ゴリラは群れの仲間と一緒に食事をします。この光景もサルには見られないものです。序列のあるサル社会では、優位なサルの前で劣位なサルは決して食べ物に手を出しませんし、食するときには散らばって、互いに目が合わないようにします。

優劣という意識がゴリラにないことは、いろいろな場面で見とれます。体の小さいゴリラが自分よりもずっと大きいゴリラに近づいて、場所を譲るゆずるように要求することもあります。

私と洞の中で一緒に眠ったタイタスは、群れの中では最年少のオスでした。そのタイタスが、あるとき年長のシルバーバックのオスの食べているものを分けてもらおうと要求しにいったことがあります。

そのシルバーバックのオスの名は、ピーナツと言います。ピーナツは③ハゲニアの木の前に座^{すわ}って、樹皮をはがして食べていました。よつぽどおいしいのでしよう。目を瞑^{つぶ}って味わう様子は、人間がビスケットを食べているかのようでした。

タイタスはピーナツから三メートルほどのところで立ち止まって、じっとその様子を見ていました。ピーナツはタイタスのほうを見向きもしません。集中してハゲニアの樹皮を食べています。

Ⅱ、タイタスはピーナツに触れんばかりの距離まで近づき、じつとピーナツの顔をのぞき込み、続いてピーナツが持つているハゲニアの樹皮に顔を近づけました。「それ、おいしそう。僕も食いたい。ちょうだいよ」と言っているかのようです。

それでもピーナツはひとりで樹皮を食べ続けました。タイタスはあきらめずに、何度もピーナツの顔をのぞき込み続けました。

ピーナツはとうとうあきらめて、最後に一枚樹皮をはがすと、その場を去ったのです。すかさずタイタスは先輩であるピーナツがあけてくれた場所に陣取り、ハゲニアの樹皮をはがして満足げに食べ始めました。

A
 なのものが
 B
 なものを立ち退かせて食べ物を得るということは、サルの社会では決して見られません。それはサル社会を支える優劣のルールに反することなので、起き得ないのです。

タイタスとピーナツの行動に関してさらに不思議なのは、その付近に生えていたハゲニアの木がその一本だけではなかったということです。タイタスはほかのハゲニアの木

の樹皮を食べることもできたし、もつと言えば、ピーナツを立ち退かせずに、反対側に回って食べることもできてきたはずなのです。

「いったい、この行動にはどういう意味があるのでしょうか。」

年長のゴリラであるピーナツは、せっかく見つけた採食場所を年少のゴリラであるタ
イタスに譲りました。そのことによってピーナツは、タイタスを許容する間柄あいだから、すな
わち親しい仲であることを示したのです。これは、ゴリラ社会では食べることは食欲を
満たす以上のものであり、さらに言えば食べ物を分配したり、食べる場所を譲るとい
う行為には何らかの意味があるということを示しています。

ただ近くにいることを許容するだけではなく、食べ物を共有することに大きな意味があるのです。これは同調と共存への願望ととれるでしょう。相手を見つめたりのぞき込んだりするのには、その了解を相手と確認するためです。ゴリラは食べ物を前にして、共存と許容を仲間と示し合うのです。

やまぎわじゆいち
(山極寿一)『サル化』する人間社会』による)

注 *Ⅰ ヒエラルキーⅡ階層。上位から下位まで序列が決まっていること。

*2 誇示りみせびらかすこと。

*3 仲裁に争いを仲直りさせること。

＊４ シルバーバックⅡ背中に白銀色の体毛をもつ、成熟したオスのゴリラ。

(1)

I

・

II

に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から選りなさい。

ア	Ⅰ Ⅲ しかし	Ⅱ Ⅲ さらに
イ	Ⅰ Ⅲ つまり	Ⅱ Ⅲ そして
ウ	Ⅰ Ⅲ ところが	Ⅱ Ⅲ すると
エ	Ⅰ Ⅲ なぜなら	Ⅱ Ⅲ もつとも

(2) — 線部①「『負ける』という概念を持たないことも、特筆に値する特徴です」とありますが、なぜこのことが「特筆に値する特徴」なのでしょう。次の文の空らんに入らうように、文章中の言葉を用いて十五字以内で答えなさい。(句読点は除くものとします)

— 特徴だから。

(3) — 線部②「これはまさにゴリラ特有の行動です」とありますが、なぜサルはゴリラとちがってこのような行動をとらないのですか。その理由がわかる一文を文章の中から探し、はじめの五字をぬき出しなさい。(句読点も一字として数えます)

(4) ゴリラの間でけんかが起こったときの解決方法としてあてはまらないものを、次の中からすべて選びなさい。

- ア メスや子どもが、攻撃されているほうのオスに味方する。
- イ けんかをしている者同士が、顔を近づけてじっと見つめ合う。
- ウ オスが、けんかをしている子ども同士の間を割り込ませる。
- エ 子どもが、けんかをしているオス同士の間に入り、顔をのぞき込む。
- オ けんかをしている者同士が、抱き合ったり背中や腰に軽く触れたりする。

(5) — 線部③「ハゲニアの木」とありますが、この木に関わる「タイタス」と「ピーナツ」の行動の説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア 食べる場所を共有することで、年長者と年少者の立場が平等であることを認め合おうとした。
- イ 年長者が年少者に食べ物を譲ることで、年少者が大事にされる社会であることを示そうとした。
- ウ 食べ物を共有することで、年長者と年少者が互いに許容しあう仲であることを確かめ合おうとした。
- エ 年少者が年長者から食べる場所を譲ってもらうことで、年長者に認められていることを確認しようとした。

(6)

A

・

B

には互いに意味が反対になる言葉が入ります。

B

に入る漢字二字の言葉を文章中からぬき出しなさい。

(7) この文章の内容や書き進め方について述べたものとして最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア ゴリラの立場から行動の理由を説明することで、ゴリラが人間やサルと共存できる動物であることを主張している。
- イ 読者に問いかけ、それに答える形で論を展開することで、ゴリラが仲間を攻撃しない動物であることを強調している。
- ウ ゴリラの行動を観察する中で発見したことを順番に説明することで、ゴリラのすばらしさについて、くわしく述べている。
- エ サルなどに対比させながら行動の具体的な様子を挙げることで、ゴリラ社会の特徴について、わかりやすく解説している。

特徴だから。

(国語)

۱۵۵۰

※記入しないこと

三
(1)
(2)